

石川県立美術館開館35周年・日本伝統漆芸展第35回記念

特別展 URUSHI 伝統と革新



松田権六《蓮菜之棚》当館蔵
「URUSHI 伝統と革新」より

- 特別陳列 加賀藩の美術工芸 I 【古美術】
- 特別陳列 漆皮—近代の文化財修復と伝承— 【工芸】
- 漆の美 【古美術】
- 鴨居 玲 教会 【近現代絵画】
- 優品選 【近現代絵画・彫刻】

- 展覧会回顧「特別陳列 前田家の名宝」
- ミュージアムレポート
- 10月の行事案内・ミュージアムウィーク
- アラカルト ただいま展示中



《時絵十二支図硯箱》五十嵐不尽
「漆の美」より

第7・8・9展示室

石川県立美術館開35周年・日本伝統漆芸展第35回記念

URUSHI 伝統と革新

主催：石川県立美術館・公益社団法人日本工芸会
NHK金沢放送局・NHKプラネット中部
特別協力：東京国立近代美術館 後援：北國新聞

9月15日(土)～10月14日(日)会期中無休

日本伝統漆芸展三十五回を記念する本展は、日本工芸会に所属する作家を軸として、江戸時代の技術を継承する明治時代の名工から、新進気鋭の現代作家までの作品を近代漆芸の歴史を紹介するものです。展覧会は四章からなり、企画展示室の第一室が第一章と第二章、二室前半が第三章、二室後半と三室が第四章ですが、それぞれの章の作家の多くは、前後に続く章の作家と師弟関係にあります。どの作家が師弟であったか、詳細は図録に掲載されていますが、順を追って年代ごとに作品を鑑賞するだけでなく、師弟の作品を比較することで、師から受け継いだもの、独自の新しい展開をそれぞれの作品に見ることが出来る展示となっています。

第一章「近代の名匠」は近代工芸の黎明期とも言える、明治から戦前までに活躍した作家たちです。石川県内の作家はほとんど行っていない「蒔醬」という技法による、玉楮象谷の重要美術品《彩色蒔醬料紙箱・硯箱》(香川県立ミュージアム)、松田権六の師・六角紫水の代表作《蒔絵理想界の図手箱》(広島県立美術館)など、近世までの漆芸技術を高いレベルで身につけた作家たちの優品が揃います。

第二章「重要無形文化財と日本工芸会」では、前回このページでご紹介した松田権六、高野松山、音丸耕堂、前大峰、磯井如真ら、初期の重要無形文化財保持者(人間国宝)であり、日本工芸会設立の中核となり、そして現在まで続く日本伝統工芸展の開催に貢献した五名の作家の代表作を展示します。

第三章「日本伝統漆芸展へ」は日本工芸会の漆芸部会設立を背景としています。石川県関係では松田権六の弟子であった大場松魚や、寺井直次、塩多慶四郎など、つい先頃まで活躍していた作家たちの作品が並びます。高い技術を駆使した、独創的な意匠の作品群からは、漆芸部会設立と運営という目的を同じくしていた作家たちが、精力的に制作を行っていた様子がうかがえます。

続いて第四章「現在をつくる作家たち」では、現在活躍中の作家たちの作品を紹介します。各作家選りすぐりの一点、人間国宝は二点ずつの展示で、近年の日本伝統工芸展や日本伝統漆芸展出品作、受賞作が中心です。展示を通して、伝統の継承を踏まえ、未来へと進む作家たちの想いを感じとっていただければ幸いです。

※展示替のお知らせ

前期のみ(九月三十日まで)

赤塚自得《竹林図蒔絵硯箱》(京都国立近代美術館)

松田権六《赤とんぼ蒔絵箱》(京都国立近代美術館)

高野松山《栗鼠模様木地蒔絵手箱》(京都国立近代美術館)

後期のみ(十月一日から)

赤塚自得《竹林図蒔絵文台》(京都国立近代美術館)

松田権六《松蒔絵飾箱》(石川県立美術館)

前大峰《沈金牡丹文手筥》(石川県立美術館)



高野松山《静動文庫》東京藝術大学



赤塚自得《竹林図蒔絵文台》(後期のみ)
京都国立近代美術館蔵

加賀藩の美術工芸 I

9月1日(土)～10月14日(日)会期中無休

学芸員の眼

加賀藩主・前田家の美術工芸に関連した文化政策は、収集と育成に大別されます。大名家が、自家のステイタスを表明する手段として古今の名品を収集することは、江戸時代では一般的ですが、前田家はその質と量において他家を圧倒しています。このような妥協を排した姿勢は、育成においても見られます。たとえば今回展示される《巖浪時絵真鳥羽筆筒》(清水九兵衛作)の時絵表現には、精緻さと力感が極めて高い次元で融合されています。本作は、加賀藩五代藩主・前田綱紀の飽くことなき知の探究の一環として発注されたものですが、それだけに制作者のプレッシャーは大抵ではなかったでしょう。こうした藩主と制作者との高次の精神的な緊張関係が、新たな表現様式へと結実していきました。綱紀の時代には、画家の久隅守景や喜多川相説も金沢で制作を行ったと考えられます。いわゆる「加賀時絵」には、どこか彼らの息吹が感じられるようにも思います。

《巖浪時絵真鳥羽筆筒》

加賀藩三代藩主・前田利常は京都や江戸から名工を招聘して、美的かつ技術的に極めて高い水準の仕事を要求しました。この姿勢は五代・綱紀にも継承され、「加賀藩の美術工芸」の大きな特質となっています。今回は、企画展に関連して第二展示室の特集と合わせて「加賀時絵」の名品を展示していますが、前田家による美術工芸の振興政策には、戦略的な側面もありました。その一つは名工による最高の仕事であり、洗練された表現や技法によって発注者たる前田家の教養をデモンストレーションする明らかな意図が認められます。

もう一つは、この技法の追求が単に美的な関心のみを志向したものではないことです。五十嵐道甫や清水九兵衛の指導を受けて制作にあたったのは、武

器や武具の制作にあたっていた工人だったと考えられます。そこには当然、軍事的な技術の維持と新たな可能性の模索も意図されていたことでしょう。この点が、前田家が追求した「美の力」の独自の側面と
言うことができます。

この他、今回は花鳥をモチーフをとした作品も展示しています。《鳥画帖》は、江戸時代の博物学的な関心の高まりを受けて編集されたものですが、鳥の姿態の多くは古画に取材しています。そして、日本の室町から江戸時代の花鳥画は、中国・明時代の花鳥画から大きな影響を受けていることを、合わせて展示する王若水の《花鳥図》から確認することができます。本作は吉祥図ですが、近代に至るまで花鳥のモチーフには吉祥的な意味が付随してきました。

重文 《扇面散時絵手箱》

第5展示室

漆皮

—近代の文化財修復と伝承—

9月1日(土)～10月14日(日)会期中無休

第2展示室

漆の美

9月1日(土)～10月14日(日)会期中無休

今回は企画展にちなんだ特集です。加賀蒔絵や琳派のように、江戸時代は漆芸で注目すべき展開が見られます。特に十八世紀以降は、豊かな財力を背景とした町人が新たな文化の担い手として台頭し、それが美術工芸の世界にも大きな影響を与えます。尾形光琳は公家、大名家、幕府役人、豪商など様々な顧客層を持ち、そのことが時代を経ても愛好される様式の確立へとつながりました。「漆の神様」と呼ばれた松田権六は生前、江戸時代の漆芸は琳派以外見るべきものがないとしばしば語り、その卓抜な意匠感覚を絶賛しています。そして松田自身、表面的に光琳意匠を模倣したのではなく、やまと絵精神を継承した光琳の構想・組み立てへの深い洞察をもって《蓬萊之棚》のような歴史的名作を生み出しています。

今回展示される作品は慣例的に尾形光琳作となつていますが、光琳その人が蒔絵を行ったり、貝を削つたりしたものではありません。松田が語ったように、光琳の構想・組み立てにより制作されたもので、年代は光琳の最晩年以後と考えられます。そして白楽天や鹿などの意匠には、俵屋宗達の影響が認められます。宗達と光琳は、ゆるやかな血縁関係で結ばれていたと考えられますが、その「ゆるやかさ」の中には本阿弥光悦や五十嵐道甫もはいつてきます。そして加賀藩主・前田家が発注者、雇用主としてそのゆるやかな集団に関わることによって、加賀蒔絵という独自の世界が生まれました。唐物への審美眼を保持しつつ、前田家がどのように新たな表現を目指していったのかの一端も、今回の展示で紹介しています。

本展示では漆工のほか金工や木竹工など、幅広いジャンルの作品を取り上げました。いずれの作品にも共通するのは、平安時代以前の古文化財を模している、ということ。古文化財をほぼそのまま写しとった作品には、初代諏訪蘇山《青磁花瓶》(石川県立工業高等学校蔵)が挙げられます。和泉市久保惣記念美術館所蔵の国宝《青磁鳳耳花生 銘万声》を写したとされます。当時は京都・山科の毘沙門堂にあったもので、蘇山は透明感ある青の再現に心を砕きました。蘇山は同様の作品をもう一点手がけており、現在そちらは東京国立博物館の所蔵品に加えられています。

金工では、般若勘溪《正倉院宝物模 佐波理加盤》(高岡市美術館)にご注目ください。奈良・東大寺正

倉院に伝わる《南倉47 佐波理加盤 第1号》を精巧に写しており、10口の器を入子状に重ねることができ、最も大きい一つは蓋。铸造、轆轤挽きの方法で制作され、最も薄いところはわずか0.3ミリという繊細さです。般若勘溪は富山県高岡市生まれで、本作品以外にも宮内庁の依頼を受け古文化財の模造を行ってきました。

近現代に活躍する工芸作家にとつて、正倉院宝物をはじめとする古文化財は、常に新しい輝きをもつて目に映りました。一方、それらの文化財を模造・修復する上には作家たちの脈々と受け継がれてきたわざが不可欠だったのです。古から現代へと、互いに



般若勘溪《正倉院宝物模 佐波理加盤》高岡市美術館蔵



《蒔絵梅椿若松図重箱》尾形光琳

第4・6展示室

優品選

9月1日(土)～10月14日(日)会期中無休

近現代絵画・彫刻では深まりゆく秋の気配を優品の展示から感じていただきたくおもいます。

日本画では、八月二十九日から京都国立近代美術館で開催される「生誕一〇〇年東山魁夷展」にちなみ、東山魁夷作品をご紹介します。作品名《瀧》。昭和二十九年制作の大作です。近年寄託された本作は、展示される機会も増えてきました。魁夷にしては無骨ですが、堂々たる迫力です。

油彩画では、宮本三郎、高光一也らの基本作家に加え、開光市《見えない三つの音》を展示します。暗く、深い独自の世界を持つ本作家には根強いファンがいます。本作も一見おどろおどろしい画面ですが、つい目がいき、そのうちに開ワールドともいべき

世界に引き込まれてしまう作品です。

彫刻部門では、堀義雄を中心とした抽象的な乾漆作品を中心に紹介しています。堀義雄は、乾漆という日本の素材を用いることによって、日本独自のものといえる彫刻を目指した作家です。その他、吉田三郎の《駝鳥》や《満州風景》など小ぶりの動物彫刻もあわせてお楽しみください。

素描では、若き日にドイツで過ごした脇田和の素描作品をご紹介します。17歳から学んだベルリン国立美術学校では、対象をじっくり見て正確に輪郭を描写する指導方針が取られていたようですが、人物の骨格や肉付きが無駄のない線描でとらえた脇田の非凡さがうかがえる作品群です。



開光市《見えない三つの音》

第3展示室

鴨居 玲 教会

9月1日(土)～10月14日(日)会期中無休

『鴨居玲画集』(日動出版、二〇〇〇年)には四十四点の教会作品が掲載されていますが、今回ご紹介する《教会》は、未掲載の百号で、しかも数多い教会の中でも、最もドラマチックな一作といえるでしょう。構成は下記の図版のとおり、大きな窓を通して、宙に傾いて浮かぶ教会を見るというものです。

鴨居の人物作品はドラマの一場面を切り取ったような構図が多いのですが、実際に舞台やステージ、小説に触発された時、そのドラマ性はいつそう強まるようです。ステージでいえばイ・スンジャさんが望郷のアリランを歌う姿を描いた《望郷を歌う故郷英洋に捧ぐ》、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』から想を得た《蜘蛛の糸》、芝居では内藤武敏氏らの舞台劇「アンネの日記」を観て、感動のあまり描いた作品に《ドワはノックされた(アンネの日記より)》があります。

ドアが何時ノックされるかと息を潜めて身を寄せるアンネたち、その後ろには密告者が我関せずと反対方向を向いているという構図です。

本《教会》は、鴨居がいったんは、宙に傾き浮かぶ教会として完成させ、その後、描き直し、未完のままに終わったと思われるのですが、実はアンネが救いを求めて、幻としてイメージした教会を想定したというのです。

鴨居は人物にしろ教会にしろ、大地に立たせることに苦慮しました。安住や安定することに疑問を抱いていたのです。こうした思いが宙に浮かび傾く教会を生みました。そこからさらに一歩進みたいというあがきを、後塗りで艶の引けた十字架状のガラス枠や窓枠に感じるのでした。



鴨居玲《教会》

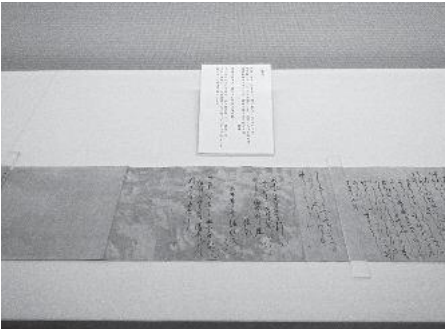
展覧会回顧

特別陳列 前田家の名宝

会期 7月27日(金)～8月28日(火)

前田育徳会尊經閣文庫分館の展示では、藩祖・前田利家以来の前田家の根本方針である「文武二道」を常に念頭に置いていきます。そして前田家の場合は、江戸幕府に対する「文による武」の姿勢が大きな特徴となっています。たとえば今回の特別陳列の中心となった国宝《広田社二十九番歌合》ですが、歌合自体は平安時代後期の歌人道因(藤原敦頼)が撰歌・結番したものに、歌人藤原俊成が加判した後、能書家藤原実家が清書を行い、摂津国広田社に奉納されました。しかし、このときの加判原本と清書本は現存せず、判者の俊成が原本から転写した自筆の手控本が今回展示されたものです。それゆえ、本作は年紀が明確な俊成の書風を伝える貴重な資料であり、この点が前田家収集の大きなポイントだったと考えられます。このように歴史的価値、希少性、美しさなどを妥協なく追求する収集方針に、前田家の戦略的姿勢をうかがうことができます。

そして今日、良好な状態で前田家のコレクションを実現できるのは、前田家十六代・利為の多大な尽力によるものであることを忘れることはできません。前田利為は、加賀藩五代藩主・前田綱紀の文化政策に深く共感し、財団の設立など新しい時代にふさわしい形で文武二道に基づき加賀藩主・前田家の文化政策を継承しました。本年度は利為顕彰の一環として、十月七日に当館ホールで開催される百万石の文化講座で、前田育徳会の菊池浩幸主幹を講師として「前田利為侯と美術工芸」と題した講演会を行います。是非ご来聴ください。



国宝《広田社二十九番歌合》下巻奥書

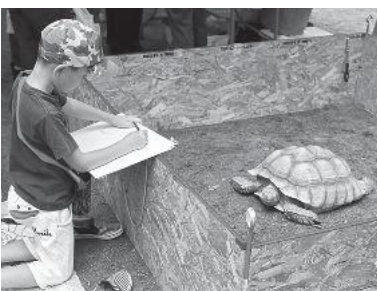
ミュージアムレポート

夏休み親子で楽しむ美術館

「夏休み親子で楽しむ美術館」の今年のテーマは、「アートde動物 大集合!」。夏休みの小学生親子の体験講座も、動物をテーマに楽しみました。

八月十日開催の「レッツッ! マリオッティ〜手遊び動物園〜」は、影絵遊びのキツネや犬のように、自分の手を動物の形に見立て、さらに色も塗って作品にする活動です。この創作活動で知られるイタリアの造形作家・マリオ・マリオッティさんの作品に倣い、日常の手の役割を超え自分の手を動物に変身させることは、とてもワクワクする活動です。ご参加の親子の皆さんは、手の形を相談し合ったり、手に色を塗り合ったりするなど活動を存分に楽しみ、マリオッティさん顔負けの豊かな発想の作品をたくさん生み出しました。

十二日開催の「動物園deスケッチGO!」は、楽しく学べる移動動物園・ZOOTIMEさんを広坂別館前の広場にお招きし、動物園の園長さんからの動物に関するお話を聞きながら、スケッチを楽しむ講座です。かわいい動物、あまり目にすることがない珍しい動物を前に、参加者の好奇心いっぱいいなまざしで描かれた作品は、動物園のスタッフの方々もびっくりの力作揃いでした。



いしかわ文化の日

石川県では、平成二十七年四月一日に施行した「いしかわ文化振興条例」において、文化施設を利用したり、文化活動に参加することにより、いしかわの文化をより身近に感じていただけるよう、芸術の秋である十月の第三日曜日を「いしかわ文化の日」と定めました。今年度は十月二十一日にあたります。そして「いしかわ文化の日」から十一月三日の文化の日までを「いしかわ文化推進期間」とし、県内全域で様々なイベントを開催しています。

当館では「いしかわ文化の日」当日、コレクション展示室を無料で開放しています。また、「いしかわ文化推進期間」中は、オリジナル記念品がもらえるスタンブラリーの対象施設となっています。詳しくは石川県文化振興課のホームページをご覧ください。

ミュージアムウィーク

兼六園周辺文化の森では、文化の秋を満喫する「秋のミュージアムウィーク」が十月二十一日(日)から十一月四日(日)の期間、行われます。当館関連のイベントをご紹介します。

◆辻口博啓シェフのスイーツパフォーマンス会

世界最高峰のパティシエ辻口氏が会場ですイーツデコレーションを実演します。

日時：十月二十一日(日)午後二時～三時三十分

会場：美術館講義室

料金：一〇〇〇円(ケーキセットつき)

申込：往復はがきに住所・氏名・年齢・電話番号・人数を記載して左記まで。

(一通につき二名まで応募可)。定員五十名。十月四日(木)必着。

〒九二〇一八五八〇(住所不要)石川県文化振興課

「辻口博啓シェフのスイーツパフォーマンス会」係まで。

◆展示室でスケッチGO!

磁気式ボードを使って、コレクション展示室のお気に入り作品をスケッチしてみよう。所要時間は三十分程度です。申込不要です。

日時：十月二十七日(土)午前十時～十一時三十分(受付時間)

料金：展示室の観覧料が必要です。(高校生以下無料、一般の方は団体料金に割引されます)

対象：どなたでも

◆修復特別実演

修復技術者が修復作品の解説や修復内容を紹介します。実演作業を目と耳で体感できます。参加無料、申込不要です。

日時：十月二十八日(日)①午前十時～十一時 ②午後二時～二時三十分

会場：石川県文化財保存修復工房・石川県立美術館広坂別館

対象：小学生以上

10月の行事予定

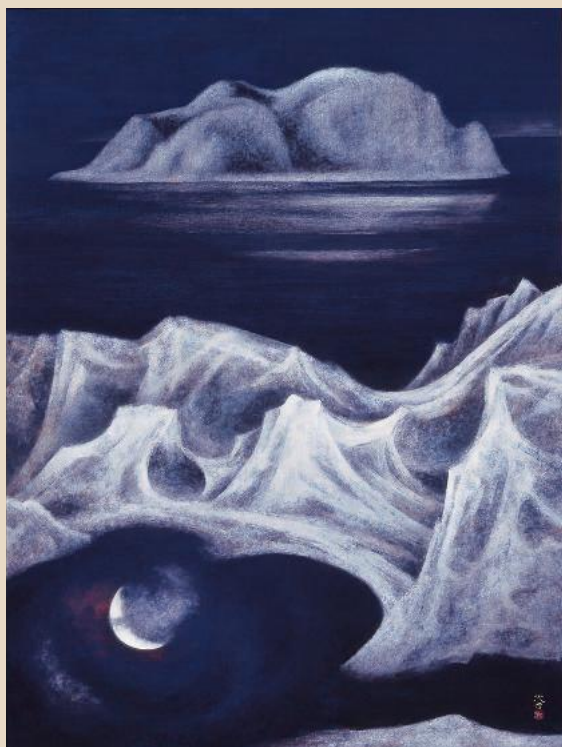
14日(日)	石川の匠たち 極光 人間国宝 寺井直次(25分) 文化庁工芸技術記録映画「蒔絵 中野孝一のわざ」(37分)
7日(日)	演題 前田利為侯と美術工芸 講師 菊池浩幸氏 (公財)前田育徳会主幹
6日(土)	漆の美々加賀時絵と琳派を中心に 村瀬博春
13日(土)	中国の茶書を読む3 ―『大観茶論』と徽宗皇帝その1― 村上尚子
6日(土)	漆の美々加賀時絵と琳派を中心に 村瀬博春
13日(土)	中国の茶書を読む3 ―『大観茶論』と徽宗皇帝その1― 村上尚子
14日(日)	石川の匠たち 極光 人間国宝 寺井直次(25分) 文化庁工芸技術記録映画「蒔絵 中野孝一のわざ」(37分)
7日(日)	演題 前田利為侯と美術工芸 講師 菊池浩幸氏 (公財)前田育徳会主幹
6日(土)	漆の美々加賀時絵と琳派を中心に 村瀬博春
13日(土)	中国の茶書を読む3 ―『大観茶論』と徽宗皇帝その1― 村上尚子
14日(日)	石川の匠たち 極光 人間国宝 寺井直次(25分) 文化庁工芸技術記録映画「蒔絵 中野孝一のわざ」(37分)

《玄映》げんえい

縦199.9 × 横148.6(cm) 昭和51年(1976) 第8回改組日展

曲子光男 まげし・みつお

大正4年～平成23年(1915～2011)



以前、美術系の大学には必修科目に「図学」なる授業があり、三次元の立体をいかに平面上に作図するかという、数学的思考を要するものでした。現在でも一部開講していますが、パソコンを活用した履修内容に、隔世の感が否めません。

さて、本作は海に浮かぶ氷山と、水面に映る月をテーマに描かれた、ほぼモノクロームの作品です。図学的にみると、画面左下にある月の鏡像と、奥の氷山や水面を照らす月影との位置は捻れています。氷山や水面を照らす月影が正しければ、月の鏡像は右下に位置し、月の鏡像が正しければ、水面に映る月影は左よりに描かれるはず。ど

うやら本作は作者の心象風景のようです。タイトル《玄映》の「玄」という文字は黒または天空の色を意味します。白い氷山と月、そして天空。それを「映す」水面。冷たく冴えた空気に暗く静かな時間が流れる作者の心象です。

作者曲子光男は大正四年に北海道で生まれましたが、幼少期に父を亡くし、石川県内の親戚に預けられました。その後京都に転居し、京都市立絵画専門学校在学中より、堂本印象に師事。画塾東丘社、また京都画壇の中心的存在として日展で活躍し、金沢美術工芸大学で後進の指導にも尽力しました。

次回の展覧会

平成30年10月18日(木)
～11月19日(月)

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2 展示室
加賀藩の美術工芸Ⅱ	石川の文化財
第3・4・6展示室	第5 展示室
秋の優品選	画家とやきもの
	1 F 企画展示室
	第65回 日本伝統工芸展 10月26日(金) ～11月4日(日)

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 360円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
毎月第1月曜日はコレクション
展示室無料の日(10月は3日)

今月の開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後7:00 年中無休

10月の休館日は
15日(月)～17日(水)

「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか?

石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、
県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ

郵送配布!! 3,000部発行

ターゲットを狙った
知名度向上県立美術館発行の
信頼度の高い広報媒体

お問い合わせは

092-716-1401

株式会社ホープ

福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ市場 福岡証券取引所Q-Board市場 財源確保 検索

広告

石川県立美術館だより
第420号(毎月発行)
2018年10月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel: 076(231)7580
Fax: 076(224)9550
URL: <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>